

# 育児不安と子育て支援ニーズに関する研究 —母親の育児不安と高校生の育児不安イメージの比較から—

八島 美菜子<sup>1</sup>、田頭 伸子<sup>2</sup>、江坂 美佐子<sup>2</sup>

## Survey on mother's anxiety of child-rearing and their needs for child-rearing support —Focusing on the comparison of mother's anxiety and the impressions of high school students regarding child-rearing anxiety—

Minako YASHIMA<sup>1</sup>, Nobuko TAGASHIRA<sup>2</sup>, Misako ESAKA<sup>2</sup>

The purpose of this study is to investigate mother's anxiety of child-rearing and their needs for child-rearing support through a questionnaire survey. Further, the impression of child-rearing that high school students have was also examined, and compared their impression with mother's anxiety of child-rearing. As a result, we have found that mothers feel physical and mental fatigue rather than loneliness during child-rearing. On the other hand, high school students think that mothers have more feeling of loneliness than physical and mental fatigue. There was a dissociation between the real feeling of mothers and the impression of high school students. Moreover, there was a big difference between mother's demand and available service in terms of being free from child-rearing and refreshing. Mothers who are physically and mentally exhausted from child-rearing are looking for "a place to take care of their children" and "a time to forget about child-rearing". Therefore, it has to be necessary to provide human resources and places to provide such support, and the environment where mothers can use such services must be arranged.

キーワード：育児不安 child-rearing anxiety、育児による疲労 tiredness due to child-rearing、子育て支援ニーズ child-rearing support needs

### 1. はじめに

厚生労働省が公開した「平成28年人口動態統計月報年計」<sup>1)</sup>によると、平成28年に生まれた赤ちゃんの数は、976,979人であった。明治32年に近代的な人口統計が開始されて以来、初めて100万人を下回った。合計特殊出生率は1.44と前年度とほぼ同じであったが、人口置換水準（約2.1）

には遠く及ばない数字である。この年の死亡数が1,307,765人であったため、人口は330,786人減少し、過去最大の減少数となった。平成2年に丙午の年の合計特殊出生率1.58を0.01下回り、「1.57ショック」という言葉が生まれて以来、本格的に取り組まれてきた子育て支援政策であったが、なかなか少子化に歯止めがかからないのが現状である。

本学の広島長束キャンパスが位置する広島市安佐南区は、都心部で働く人のベッドタウンとして人口が増加し続け、現在24万人を超えている。広

<sup>1</sup> 広島文化学園大学 Hiroshima Bunka Gakuen University

<sup>2</sup> 広島文化学園短期大学 Hiroshima Bunka Gakuen College

島市の8つの区の中で最も人口が多い。若い転入者の影響か、高齢化率は高くはない（約20%）。ただ、人口に比例して高齢者の人数は多く（約4万7千人）、一方で、14歳以下の人口も多い（約4万2千人）という特徴がある。1年間に生まれる赤ちゃんの数も2,600人を超えている。もちろん8つの区では1位であり、広島市で1年間に生まれる赤ちゃんの約4分の1を占めている。転勤の家族も多く、本学の0、1、2歳児対象の子育て支援施設である「ぶんぶんひろば」の利用者からも、転勤して知り合いが無く、この広場があってよかったという声がしばしば聞かれる。

以下に安佐南区（広島市）で行われている子育て支援について概観していく。平成29年度を例にとり紹介すると（図1、写真1参照）、健康診査などに関しては、妊娠中には、母子健康手帳の交付と妊娠相談、妊婦一般健康診査（14回医療機関・助産所で実施）、妊婦歯科健康診査（1回医療機関で実施）がある。産前・産後サポート事業、産後ケア事業、産後ヘルパー派遣事業があり、赤ちゃんに対しては、新生児・未熟児家庭訪問指導、こんにちは赤ちゃん事業、新生児聴覚検査、先天性代謝異常等検査、1歳になるまでに2回受ける乳児一般健康診査があり、4か月児健康相談が個人に通知される。1歳を過ぎると、1歳6か月児健康診査と1歳6か月児フッ素塗布の実施が個人通知され、3歳5か月になると、3歳児健康診査が通知される。

また、育児講座・健康相談等では、パパとママの育児教室、わかばママわかばパパ応援教室などが実施される。安佐南区保健センターの担当者からの聞き取りの際には、4か月児健康相談から、1歳6か月児健康診査までの期間が1年以上開くことが気になりとのことだったが、その間も、離乳食教室や育児講座が開催され、妊産婦乳幼児家庭訪問（保健師が必要に応じて訪問する制度）も利用できる。健診などで気になる幼児や育てにくさを感じる親のための親子教室も用意されている中区まで出向けば「つどいの広場」があるが、行きやすく便利な場所は、区が開設するオープンスペース（安佐南区は1か所）、民間が運営する公募型常設オープンスペース（安佐南区は2か所）、地域の有志により公民館や児童館等で開催されるオープンスペース（平成29年度は区内に35か所）

や子育てサークルである。安佐南区は子育てサークルの歴史が古く、充実しており、区内に33のサークルがある。「広島市の主な母子保健サービス」というチラシには、「健康のことや育児等について、不安なことやわからないことがあれば、お気軽に保健センターへご相談ください。」という文言と電話番号が書かれている。ある意味で、「ワンストップ型」の福祉サービスと言える。

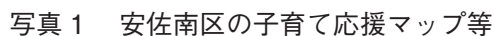
このような環境の中、子育て中の保護者（主として母親）は、日常的に不自由のない物質とサービスがあり、安心して子育てができていような感じを受けるが、実際にはどうであろうか。地域にあり、対人援助の支援者を育てることを目指す本学として、大学の専門性を活かして子どもたちの幸せのためにできることはないかと考えたのがこの研究事業である。まず、本学の「ぶんぶんひろば」利用者に対し、日々の子育てにおいてどのような意識を持ち、どのようなことが不安としてあるかという「育児不安」についての調査を計画し、ニーズの探索を試みた。

ここで、育児不安、子育てストレス等の言葉を整理しておく。吉田（2012）<sup>2)</sup>によると、我が国では、子育てに悩む母親の問題が社会的関心を集めることが多かった1980年代から、育児不安の研究が盛んに行われてきた。これらの研究では、育児不安の概念はそれぞれの研究者によって幾分異なっていると書かれている。大別すると①子どもの授乳や睡眠、排泄等に関する具体的な心配事としてとらえる立場、②育児にまつわるストレスとしてとらえる立場、③育児に限らず家事や生活の総体から産み出される母親の生活ストレスとしてとらえる立場、そして、④母親が育児に関して感じる疲労感、育児の意欲の低下、育児困難感・不安としてとらえる立場の4つである。②の立場ではストレス反応と育児不安を同類として扱っており、その区別は非常に難しい。また、海外の文献には「育児不安」（child-rearing anxiety）の用語としての認識は無く、育児ストレス（child-rearing stress）が主である。Finkが編集したストレス事典（Fink, 2007）の中で「育児ストレス」は「親であることに伴い要求されることに由来する、ネガティブな心理的・生理的反応パターン」と定義されている。母親が育児に関して感じる疲労感、育児意欲の低下、育児困難感・不安として

平成 29 年 4 月 1 日

※ 健康のことや育児などについて、不安なことやわからないことがあれば、お気軽に保健センターへご相談ください。（安佐南保健センター TEL 831-4944）

図1 安佐南区（広島市）の平成29年度の子育て支援サービス



とらえる④の立場は①②③に比べると比較的母親の実態に即しているというのが、吉田の考え方である。ここでは、吉田ら (Yoshida et al, 1999; 吉田他, 1999a, b) の説に従い、育児不安を、育児に伴う自信のなさや不安、子どもとかわるこ

との疲労感、子育てからの逃避願望、育児による社会からの孤立感などにとらえ、研究をすすめることとした。

## 2. 研究目的

0、1、2歳児を育てている母親は、育児不安を感じているのだろうか、もし感じているとすれば、育児不安による高低差があるのか、16項目の尺度を用いて調査した。また、同様の16項目の尺度を用いて、まだ子育てをしたことのない世代（高校生）を対象に、彼らが子育て中の保護者と子育てをどうとらえているのか（以下、育児不安イメージと表記する）を調査し、母親と高校生の結果を比較検討した。



### 3. 研究方法

#### (1) 対象者及び調査数

母親：本学の0、1、2歳児用の子育て支援施設「ぶんぶんひろば」を利用する母親で、2015年から2017年2月までの利用者202名に調査用紙を郵送した。返送された104名（回収率51.5%）のデータの分析を行った。

高校生：本学入学予定の高校3年生の入学準備教育の際に、集合調査で即時回収し、178名（男子20名、女子158名）から回答を得た。

#### (2) 調査時期 2017年3月

(3) 調査内容 質問項目は選択式と記述式を混合した無記名自記式の質問紙で、母親用は①保護者の基本的属性に関する質問（父母の年齢、職業、同居家族の構成員）、②近隣地域に関する質問（子どもを連れて遊びに行ける家の有無、子どもを預かり合う家の有無、子どもを連れて遊び場や友達の家へ行く機会）、③日頃の気持ちや育児不安に関する16項目（宮本ら、2000）<sup>3)</sup>、④対象者を取り巻く子育てサポート環境に関する質問（該当する人や施設から受ける支援に対する満足度と実際に受けた支援内容、求める支援内容）。高校生用は、①本人の基本的属性に関する質問（年齢、性別、将来目指す職業）、②将来の子育てに関する質問（子育てしたいか、子育てに関する不安、子育てしたくない理由）、③日頃の気持ちや育児不安に関する16項目（宮本ら、2000）について現在母親たちがどのように感じていると思うか、について尋ねた。

(4) 倫理的配慮 本研究の実施にあたり、広島文化学園大学教育学研究科・学芸学部研究倫理委員会に倫理審査申請を行い、委員会の定める研究倫理指針に基づき審査を受け承認を得た上で実施した。

### 4. 結果と考察

#### (1) 対象者（子育て家族）の属性

①対象家族の保護者の職業 保護者職業について以下にある選択肢から回答を得た。父親はサラリーマンが76名（73.1%）で最も多く、母親は専業主婦が72名（69.2%）で最も多かった。

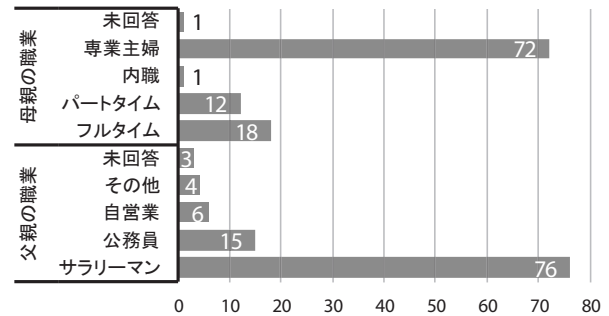


図2 保護者の職業（単位は人）

②保護者の年齢 父親、母親それぞれの平均年齢は父親35.2歳、母親33.7歳、年代別人数とパーセンテージは表1に示した。父母とも、30代が最も多かった。

表1 保護者の年齢

	父親（n=104）		母親（n=104）	
	人	%	人	%
20歳代	10	9.6	14	13.5
30歳代	64	61.5	71	68.3
40歳代	25	24.0	16	15.3
未回答	5	4.8	3	2.9

③子どもの数 世帯別の子どもの数は、「1人」が49名（46.2%）、「2人」が46名で（45.2%）、「3人」が9名で（8.7%）であった。

④保護者の両親の居場所 父方、母方のそれぞれについて「近郊、遠方、他界」別に図3に示した。父方母方いずれも、近隣に祖父母がいる家庭は全体の3分の1程度で、遠方という家庭が多かった。この結果から、普段家事や育児のサポートを頼める身内が身近にいる家庭の方が少数であることがうかがえる。

⑤子どもを連れて遊びに行ける家が近所にある「ある」が77名（74%）であった。全体の4分の3程度の家庭が、近所に遊びに行ける家があると答えていることから、普段からママ友達などお互いの家に遊びに行ったりできる環境にいたことがうかがえる。

⑥子どもを預かり合う家がある「ある」が24名（23%）であった。全体の4分の1程度の家庭が、互いに子どもを預かり合う友達をもっていた。しかしながら、多くの母親が子どもと一緒に遊びに

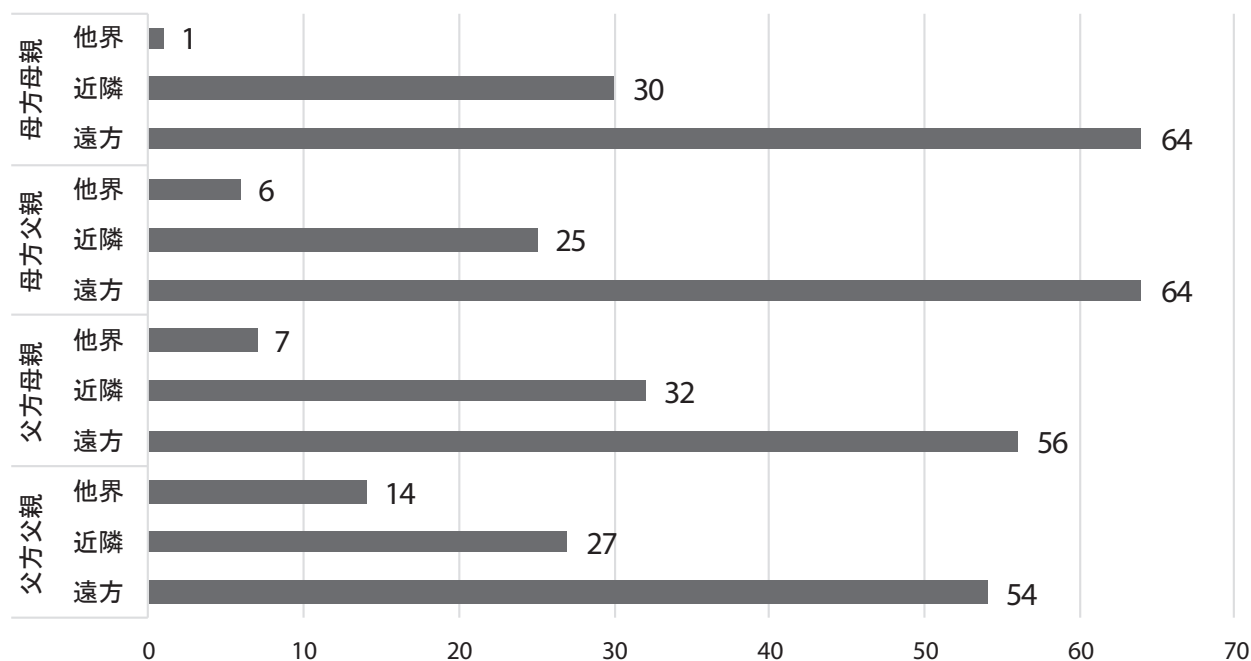


図3 保護者の両親の居住場所（単位は人）

は行けるが、自分がいない状態で預かってもらう、つまり子どもから離れられる機会をもつという点においては、ままならない現状があることが示された。

## （2）育児不安について

母親の育児不安と高校生の育児不安イメージの得点を因子分析（主因子法、プロマックス回転）したところ、母親においては3因子が抽出された（表2）。第1因子は「自分の子育てはこれで良いのだろうか」と悩む等の項目であり「子育て能力」の因子と名付けた。第2因子は「一人で苦勞している気がする」や「だれもわかってくれないと思い、落ち込む」等の項目であり「孤独感」の因子と名付けた。第3因子は「疲れが取れない」や「子育てを離れて一人になりたいときがある」等の項目であり「心身の疲労感」の因子と名付けた。

高校生の育児不安イメージを因子分析（主因子法、プロマックス回転）したところ2因子が抽出されたが、両因子には「疲れに関する項目」、「空虚な感じの項目」、「自信の無さの項目」が混在して捉えられている状況が見て取れる。この傾向は佐藤（2004）<sup>4）</sup>でも同様の傾向があったと記されている。

まず、母親の育児不安について因子別に対象者

の平均得点を算出した。高校生の育児不安イメージは母親のように明確に分離されていなかったため、母親の育児不安と高校生の育児不安イメージを比較するために、高校生においても母親の3つの構成因子に基づいて因子別平均得点を求めた。

ちなみに、高校生男女の因子別平均得点に有意差は無かったため、男女を込みにして分析した。母親と高校生における育児不安の因子別平均得点を示したものが、図4である。

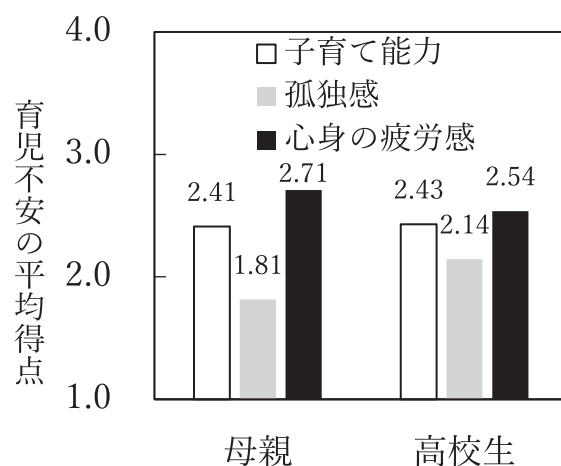


図4 母親と高校生における育児不安の因子別平均得点

表2 母親における育児不安の因子分析結果

	F1	F2	F3
<b>F1 子育て能力</b>			
自分の子どもの育て方は、これでいいのだろうかと思うことがある。	.853	-.223	.057
自分は子どものことをわかっていないのではないかと思います。	.751	.065	-.066
自分はうまく子どもを育てていないと思うことがある。	.744	-.206	.088
子どもを育てる自信がないと思うことがある。	.660	.190	-.099
子どもをたたいたりしかったりしたときにくよくよ考える。	.504	.170	-.036
<b>F2 孤独感</b>			
子どもを育てていて自分だけが苦勞していると思う。	-.080	.871	-.021
一人で子どもを育てている感じがして落ち込む。	.113	.714	-.043
だれも自分の子育ての大変さをわかってくれないと思う。	-.240	.669	.121
何か心が満たされず空虚である。	.320	.523	.017
<b>F3 心身の疲労感</b>			
体の疲れがとれずいつも疲れている感じがする。	-.077	-.047	.918
育児や家事など何もしたくない気持ちになることがある。	.034	.100	.652
疲れやストレスがたまってイライラする。	.289	.105	.403
子育てを離れて一人になりたい気持ちになることがある。	.146	.265	.362
因子間相関 F1	1.000	.607	.551
F2		1.000	.585
F3			1.000

2（母親と高校生）×3（因子）の分散分析を行ったところ、因子の主効果（ $F(2, 560)=231.40$ 、 $p<.001$ ）が有意であり、多重比較（ボンフェローニの検定）を行ったところ、第1因子は第2因子・第3因子と、第2因子は第3因子と有意差（ $p<.001$ ）があった。また、因子×群の交互作用（ $F(2, 560)=34.08$ 、 $p<.001$ ）が有意であったため、下位検定を行ったところ、第2因子においては高校生の育児不安が母親よりも高かった（ $t(280)=4.30$ 、 $p<.001$ ）が、第3因子においては母親が高校生よりも高かった（ $t(280)=2.07$ 、 $p<.05$ ）。

このことから、第1因子「子育て能力」においては母親と高校生に差が無く、第2因子「孤独感」では高校生の平均値が高かったが、第3因子「心身の疲労感」では母親の平均値が高かったといえる。すなわち、子育て中の母親は、子育て能力に関する育児不安よりも心身の疲労感を感じており、孤独感についてはそれほど高く感じていないことが示された。一方、高校生は、母親が孤独なのではと感じており、疲労感については母親ほどには気づいていないということが分かった。広島市の調査<sup>5)</sup>において、子育てを「つらい」と感じ

ることのある人が求める子育て支援は、1番目が「経済的支援」、2番目は「リフレッシュするための一時預かり」であった。この結果は特に未就学児の親において顕著であった。また、民間の調査<sup>6)</sup>でも、0～6歳の子どもを持つ母親の生活実態調査では、一日の時間的ゆとりが1時間以下という回答が50.2%と半数以上であった。

### （3）子育て環境における母親の求める支援と受けた支援について

次に、個人について専門職、近所、育児仲間に分けて、求める支援と受けた支援の内容を図5に示した。また、同様に子育て支援施設についても、求める支援と受けた支援の内容を図6に示した。

個人から受ける支援については、全体として受けた支援に関しては「相談にのってもらう」という支援が最も多く、特に育児仲間においては、受けた支援の半分以上（62%）が相談であった。近所からの支援は、求める支援と受けた支援ともに少なく、受けた支援の内容は「相談」が72%と最も多かったのに対し、求める支援の内容は「子どもを預かってくれる」が45%で最も多く、受けた支援との間にギャップがあることが示された。

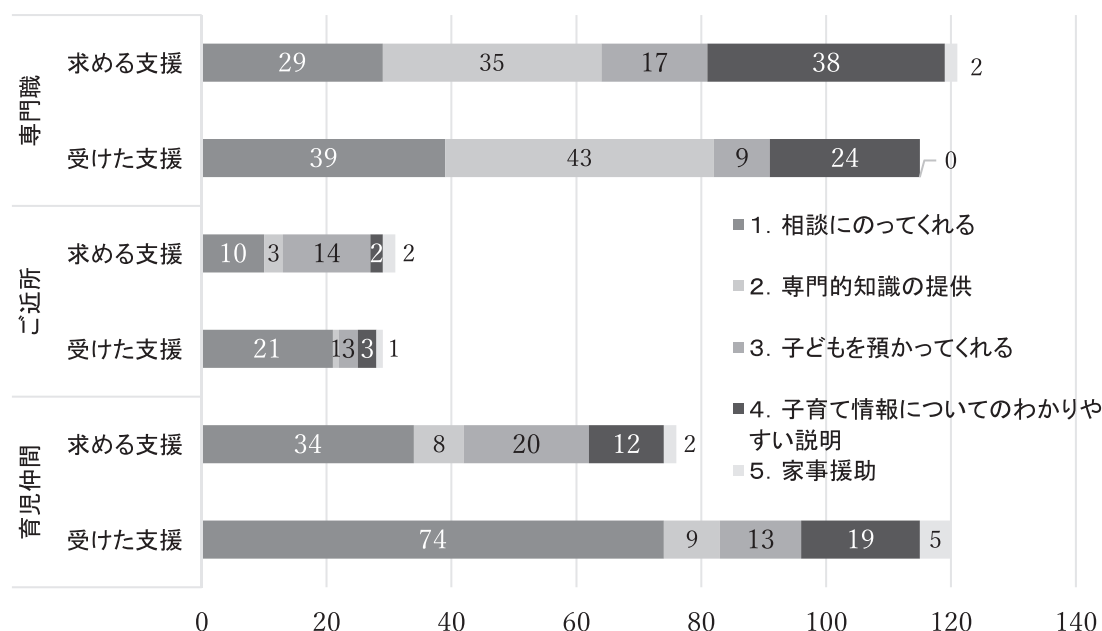


図5 子育て世帯が受けた支援と求める支援（単位は人）

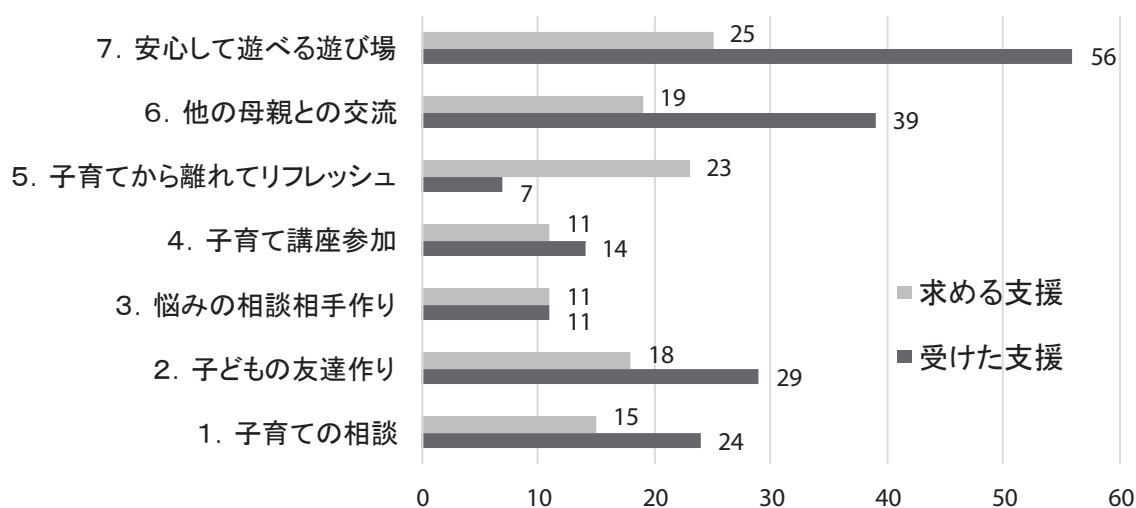


図6 子育て支援施設に受けた支援と求める支援（人）

(1)の④⑤でも示された通り、母親たちの多くは、子どもと一緒に遊びに行ける家はあるものの、子どもだけを預ける家のある人は少なく、(2)の育児不安の構造を見た際も、「心身の疲労感」を示す項目の得点が比較的高いことが示された。

図6の子育て支援施設に求める支援の内容をみると、最も多かったのは「安心して遊べる遊び場」で、次に多かったのは「子育てから離れてリフレッシュ」であった。心身の疲労感の高い母親たちは、

「子どもを預かってくれる場所」や、「子育てを離れてリフレッシュ」できる時間を求めており、それを提供できる場や人が求められている。

一方、専門職から受けた支援の内容は育児仲間や近所と異なり、「専門的知識の提供」が最も多かった。さらに、求める支援では、「子育て情報に関するわかりやすい説明」が最も多く、次いで「専門的知識の提供」であった。このことから、母親たちは専門職には身近な育児仲間や近所の人

とは違った、専門職ならではの支援を求めている、実際にそうした支援を多く受けている様子が見えてくる。

## 5. 今後の課題

今回の調査対象者の母親は、育児不安として「心身の疲労感」を顕著に示していた。そのために育児から少し離れることができる時間や場所を提供することが効果的であると考えられる。この解決策として大学の直接的な支援は難しいが、自助グループを作る支援、活動の場所の提供、心身を休めるための場（スヌーズレン等を含む）の提供、書籍の貸し出しや資料や資源の提供、その活動を支えるスタッフの養成プランの作成などが必要である。

また、行政の支援プランの中でも、4ヶ月健診から1歳半健診までの期間の「長さ」が懸念されており、その間の「育てにくさ」や「気になる子」への対応は、問題として残っている。細かく区切られた月齢において、それぞれの「育てにくさ」を発見し、子育てへの支援をしていくことが必要とされてきている<sup>7) 8)</sup>。

一般的には、心身の疲れを軽減し、疲労感を取り除く方法論の研究と、個々への問題では、「育てにくさ」へのきめ細やかな対応、そのノウハウを身につけた支援者の養成プログラムの作成が今後の研究課題である。

## 6. 引用文献

- 1) 厚生労働省：平成28年度人口動態統計月報年計，1-54，2017.  
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai16/dl/gaikyou28.pdf> (2020/9/20取得)
- 2) 吉田弘道：育児不安研究の現状と課題，専修人間科学論集心理学篇，**2** (1)，1-8，2012.
- 3) 宮本政子・舟越和代・中添和代・時岡恵美・森美代子・渋谷幸彦：乳幼児を持つ母親の育児不安の現状とその要因，香川県立医療短期大学紀要，**2**，115-121，2000.
- 4) 佐藤嘉子：乳幼児を育てている母親の意識研究 ～育児中に母親が感じる「ストレス」と「喜び」を軸とする要因解析～，花王株式会社生活者研究センター，1-8，2004.
- 5) 平成20年度 子育て支援に関するニーズ調査結果（概要），広島市こども未来局，2009.
- 6) 宮木由貴子：「育児期」の母親の生活実態，Life Design REPORT, NOTES②，24-31，2004.
- 7) 小枝達也（監修）秋山千枝子・橋本創一・堀口寿広（編）：「育てにくさ」に寄り添う支援マニュアル ― 子どもの育てにくさに困った親をどうサポートするべきか ― 診断と治療社，2009.
- 8) 山原麻郁・小枝達也：親子教室等に通う保護者の育てにくさ・困り感に関する研究，地域学論集 鳥取大学地域学部紀要，**11** (1)，31-43，2014.